

〈書評〉郭維森著・安藤信広訳 『屈原』

金川, 正治

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文學誌要

(巻 / Volume)

32

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

82

(発行年 / Year)

1985-07-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019436>

郭維森著・安藤信広訳

『屈原』

金川 正 治

「クツゲン」と言い、「ソジ」と言ったとき、一体どれほどの人が、屈原という古代中国の詩人を、また『楚辞』という詩篇集を想い浮かべることができるだろうか。李白、杜甫、白居易といった名前が日本において深く浸透しているのに対し、屈原の名はあまり知られていないように思われる。また『楚辞』が、「北の詩経、南の楚辞」と言われるほどに古代の中国を代表する詩篇集であるのにもかかわらず、その知名度は『詩経』に比べてはるかに低い。『詩経』がいわゆる「五経」の一として否応なしに普及していったのに対し、『楚辞』ではそういうことがなかったというのも、『楚辞』が日本においてあまり知られていないことの一因ではある。

しかし『楚辞』という詩篇集は、読みはじめると、これがなかなか面白い。その、詠み

語われていた時代から二千年以上もの歳月を経ているながら、今なお生きています。少しも風化していないのである。「離騷」とか、「九歌」とか、「招魂」とか、そういった詩篇の構築している世界が、それを読む現代の我々の眼前にあざやかに浮かび上がってくる。もちろんそこには、時代と言葉という大きなギャップが介在している。しかしそういったギャップを乗り越えて、なおその世界が彷彿としてくるのである。

『楚辞』に収められている詩篇は、必ずしも屈原の手になるものばかりではない。が、屈原がその最大の作者であることには何ら異論をさしはさむ余地はない。のみならず、屈原以外の作者の手になる作品にしても、あるいは屈原に仮託し、または屈原を追慕してなされたものがほとんどであり、そういったことを考えるならば、屈原が『楚辞』の世界を支え、その精神を支配していると言ってもよいだろう。

郭維森氏の『屈原』が、日中出版から安藤信広氏の訳で刊行された。これは同社の「中国古典入門叢書」シリーズの一冊として出版

されたもので、一読した印象では、屈原ないし『楚辞』の入門書としては、恰好のものと思われる。本書は、構成としては「詩人の降誕と家系」、「詩人の生きた時代」、「悲劇の生涯」、「きららかな詩篇」、「巨大な影響」という五章からなっており、それぞれがかなり手ぎわよくまとめられていて分かりやすい。作品そのものの解釈に関しては、いかにか断定的にすぎると思われる部分もあり、また首をかしげたくなくなるようなところも時に見受けられるが、しかしそういった若干の点を除けば、あとは概して良好であり、詩人・屈原（詩人としてのみならず、政治家としての屈原も）の相貌を、時代史という背景の上によく再現していると思われる。また第五章では、従来の『楚辞』の注釈書類についても言及しており、言わば小研究史といった観がある。屈原なり『楚辞』なりにについてこれから研究してゆこうとする読者たちのための、研究の手引きとしての役割をも、それは果たしていると言ってよいだろう。

本書の訳者である安藤氏は、その「あとがき」の中で「現代中国のマルクス主義の立場に立つ文学理論はあまりにも生硬である場合

が多かったが、この書物ではそれはある程度

抑えられ、文学そのものに即した論理展開が試みられていることが、仕事をしながら私には喜びだった。文学を他のものに解消せず、文学そのものとして位置付けて行く努力を、日本でも中国でも執拗に重ねるべきだと思ふ。」と述べている。私が先に作品の解釈に関して云々したことは、実は「文学を他のものに解消」しないという原著者の姿勢によるものだったのだろう。もちろん、だからといってそこに見られるような断定が、必ずしも肯定されねばならないというのではない。私としては、なおそこに疑問符を付しておかざるを得ないと感じている。ただ、文学作品の解釈にある程度の振幅の存在が許容されるとするならば、こういった問題は当然起り得ることであって、その際に読者は、それを単純に否定するのではなく、そこに注意をはたらかせながら、それを一つの手掛りとして、自己の読みを深めてゆくという姿勢が要求されなければならない。そして、そのような問題をあえて含み込みながらも、「文学そのものに即した論理展開を試み」という、そのことをこそ、むしろここでは評価すべきだろう。

う。

最後に、翻訳という観点から一言。

本書を読んで感心したのは、いわゆる「翻訳書」に多々見受けられる生硬な表現が、ここにはほとんどないということである。文章がよくこなれていて、翻訳という印象を少しも与えない。特に「研究書」の類の翻訳の場合、「文章表現よりも中身」という意識が往々にして認められ（最近ではそういった傾向はかなり減少してきているようだ）、そこでは生硬な表現がしばしば認められる。しかしそんなことがあってはならないと思う。翻訳においても、やはり「文は人なり」であり、表現もまた中身と同様に極めて重要であること、言うまでもない。それは訳者の良識にかかわることだが、その点、本書は極めて良心的と言ってよいだろう。そしてそのような翻訳が可能となるためには、単に語学力のみならず、そこで問題にされている事象なり、その背景に存する文化なりへの、深い理解と共感が要求されるだろう。安藤氏には、『楚辞』に関する論文もいくつかあり、それらを讀むと、作品を文字面からばかりでなく、感性の面からもまた同時に把えようとしている

ことが分かる。このような姿勢をもって、右に述べたような翻訳ははじめて可能となるのだろうか。

『屈原』の出版は、屈原にとっても、また『楚辞』にとっても、大いに喜ぶべきことである。本書は基本的にはあくまでも入門書であって、専門的に研究しようとする立場からは、幾分ものたりないかも知れない。しかし単に読みやすく平易であることが意図されているだけではなく、一定の水準も、そこでは保たれている。本書を一つの手掛りとして、屈原ないし『楚辞』に関心をもつ人が増えることを願ってやまない。『楚辞』の後世に及ぼした影響の大きさを考えるならば、結局は日本文学として『楚辞』と無縁ではいられないし、またそういったことを別にしても、『楚辞』それ自体の面白さを知らないということが、一つの極めて大きな損失にほかならないと思うからである。

(一九八四年九月刊 定価一四〇〇円)

安藤信広氏は文学部助教教授。

金川正治氏は大学院修士課程二年在籍。

次ページ、鈴木敬司氏は一九五二年卒。